

平成 30 年度岩手県水産試験研究評価結果報告

<外部評価による研究課題評価結果報告>

1 概要

「岩手県試験研究機関に係る機関評価及び研究評価ガイドライン」及び「岩手県水産試験研究評価実施要領」に基づき、岩手県水産試験研究評価委員会の開催により、水産技術センターと内水面水産技術センターの主要研究課題に係る外部評価を実施しました。

(平成 30 年度は機関評価の該当機関なし。)

2 評価の実施方法

(1) 水産技術センター及び内水面水産技術センターによる内部評価の実施 (4～5月)

(2) 岩手県水産試験研究評価委員会幹事会による委員会開催内容の検討 (6月6日)

(3) 研究課題評価に係る資料の事前送付 (7月13日)

水産試験研究評価対象課題6件(事前評価2件、中間評価3件、事後評価1件)に係る資料等を評価委員へ送付し、事前検討を依頼。

(4) 岩手県水産試験研究評価委員会 (7月31日開催)

ア 中期計画のローリング及び水産試験研究評価の仕組みについて事務局から説明。

イ 評価対象課題ごとに研究担当者から説明。

ウ 評価委員は、質疑等により評価対象課題の評価について検討。

(5) 評価シートの提出

評価委員は、評価対象課題の評価シートを水産技術センターへ提出。

3 評価項目

(1) 事前評価

区分	評価項目
1 背景・目的	○ 目的の妥当性
2 必要性・緊急性	○ 必要性・緊急性
3 研究目標	○ 新規性・独創性
	○ 到達目標の妥当性
	○ 期待される効果
4 研究内容	○ 事前調査状況
	○ 研究計画の妥当性
	○ 具体的研究計画の妥当性
総合評価	
研究課題の採択	

(2) 中間評価

区分	評価項目
1 研究の進捗度	○ 研究目標の実現可能性
2 情勢変化への対応	○ 情勢変化への適合性
3 研究成績	○ 研究成績の妥当性
4 研究成果の発信	○ 研究成果の発信状況
5 当年度計画	○ 当年度計画の調整状況
6 実用化技術としての評価	○ 成果公表の予定時期
総合評価	
研究課題の取扱	

(3) 事後評価

区分	評価項目
1 目標の達成	○ 目標達成度
2 研究成果	○ 研究成果の水準
3 研究成果の波及効果	○ 波及効果
4 研究の発展	○ 研究の発展可能性
総合評価	
研究課題の取扱	

4 評価結果の概要〔[課題概要はこちら](#)〕

(1) 事前評価

課題名	総合評価	研究課題の取扱	主なコメント	取扱方針
養殖貝類の呈味成分に関する研究	A:2人 B:3人	A:3人 B:2人	<ul style="list-style-type: none"> ○ 類似の貝類や他地域の同一種との比較、外洋産カキの呈味成分が内湾産と異なるメカニズム解明のための研究計画にすると更に重要な研究になると思われる。 ○ 呈味成分の分析結果は確実に得られると思うが、データの解析が重要であり既往の関連成果等の活用が望まれる。 ○ エゾイシカゲガイ及び外湾養殖マガキが他の産地のものと差別化できる点を明らかにし、競争力を持たせるために必要な研究である。 ○ 結果の利用に関しては更なる検討が必要であり、測定項目も含めて生産者のみならず、販売者や消費者の観点での検討を期待する。一部見直した上で実施した方が良いと判断する。 ○ 2種類(エゾイシカゲガイ、マガキ)にこだわらず、知見が少なく差別化が必要な他の種類も研究してもらいたい。 	<p>【一部見直して実施】</p> <p>平成30年度の計画を一部変更するほか、他地域の同一種との比較や調査期間の延長など、次期中期計画の策定に合わせて検討します。</p>
マス類バイオ種苗開発に関する研究	A:4人 B:1人	A:4人 B:1人	<ul style="list-style-type: none"> ○ ご当地サーモンブームに乗って品種作出を進める課題であり、継代飼育したヒメマスを所有していることを活かした実現性の高い取組である。 ○ 限られた予算と人員を効率的に使うため、既に実用化されているニジマス全雌3倍体の評価項目は成長に的を絞った方が良いのではないかと。 ○ 既存のご当地サーモンと差別化が可能な系統の創出を期待する。 ○ 本格的な種苗生産に結び付けるためには、新たな手法も積極的に取り入れて、開発のスピードアップを図ることも視野に入れるべきと思われる。結果を踏まえて長期プロジェクト化も視野にいれてもらいたい。 	<p>【提案内容で実施】</p> <p>ニジマス全雌3倍体種苗に係る研究は、成長改善を中心に進め早期実用化を進めるとともに、ヒメマス、サクラマス全雌3倍体種苗に係る研究は、倍化率向上等各種技術の検証を行いながら着実かつ計画的に取り組めます。</p>

【評価区分】

区分	A	B	C	D
総合評価	適切	一部見直し必要	大幅見直し必要	不適切
研究課題の採択	提案内容で実施	一部見直して実施	計画再考	不実施

(2) 中間評価

課題名	総合評価	研究課題の取扱	主なコメント	取扱方針
回遊性漁業資源の利用技術の開発	A:4人	A:4人	<ul style="list-style-type: none"> ○ 回遊性魚類の資源動向を把握し、適切な資源評価・漁況予測を行っているが、今後は更に資源量変動要因の解明と対応策の構築が必要。 ○ 計画どおりの研究成果が得られており、随時公表されている。 ○ 近隣の大学などと連携して、質の高い情報を迅速に漁業者に提供できるような体制を組んでもらいたい。 ○ 他の研究機関との連携や、国際的な資源管理の枠組みに関与している国の機関と協力して北太平洋の資源管理の適正化にも貢献が期待される。 	【計画どおり実施】
介類養殖の安定生産に関する研究	A:5人	A:5人	<ul style="list-style-type: none"> ○ シングルシード、天然採苗ともに順調に研究が進んでおり、特にシングルシードについては量産化が十分に期待できる。 ○ シングルシードマガキは各地で生産されており、成果の普及は重要であるが生産過剰に陥らないよう注意する必要がある。 ○ シングルシード技術によって、マガキ養殖の産地が県北の外洋にまで拡大できる可能性が出てきたことは成果として素晴らしい。イワガキでも技術が確立できれば、年間を通して出荷体制をとることができ漁業者にとって極めて有益である。 ○ 順調である。計画通り実施すべきと判断する。 ○ シングルシード養殖と原盤方法を比較した場合の生産効率(省力化を含む)や経営の分析も同時に進めることを期待する。 	【計画どおり実施】
県漁場環境保全方針に定める重点監視水域(大船渡湾・釜石湾)のモニタリング及び広報	A:3人 B:2人	A:4人 B:1人	<ul style="list-style-type: none"> ○ 非常に重要なモニタリングであり、順調に研究が進んでいる。 ○ 31年度以降も継続することを期待する。 ○ 硫酸還元細菌の課題は残された問題点も多いが、是非頑張って成果を挙げてもらいたい。 ○ 予算削減による観測項目の見直しの部分については拙速な対応は望ましくないように思われる。特に COD の代替に関しては慎重に検討すべきである。 ○ 釜石湾内での流れや湾口防波堤内外での海水交換がどのようになっているのかを調査項目に加えてもらいたい。 	【一部見直して実施】 硫酸還元細菌の検出に利用しているプライマーの妥当性を検討するなど、更に調査を継続して、硫酸還元細菌の有効性を検証します。

【評価区分】

区分	S	A	B	C	D
総合評価	特筆すべき進行状況にある	順調であり問題なし	ほぼ順調だが改善の余地あり	研究方法を変更する必要がある	研究を中止する必要がある
研究課題の取扱		計画どおり実施	一部見直して実施	計画再考	廃止

(3) 事後評価

課題名	総合評価	研究課題の取扱	主なコメント	取扱方針
ワカメ等海藻養殖の効率化システムの開発	A:4人	A:4人	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機器開発、技術開発については、省力化に十分な効果が期待できる成果が出ており、その点では目的を十分に達成したと言える。 ○ ワカメ養殖生産体制の見直しが残された課題と考える。 ○ 協業化による効率の向上を必要な装置開発と具体的なデータによって示した点で高く評価できる。 ○ 普及に関してはメリットを漁業者に理解してもらう必要があり、更なる努力が必要である。 	<p>【完了】</p> <p>引き続き、普及促進に向けた情報発信に努めます。</p>

【評価区分】

区分	S	A	B	C	D
総合評価	特筆すべき研究成果である	目的を十分達成した	ほぼ目的を達成した	大きく目標を下回った	目標達成できなかった
研究課題の取扱		完了	新規課題化	廃止	

5 外部評価委員

区分	所属等	氏名
学識経験者	東京大学大気海洋研究所 国際沿岸海洋研究センター センター長	河村 知彦
	国立研究開発法人水産研究・教育機構 東北区水産研究所 業務推進部長	藤井 一則
	北里大学海洋生命科学部附属三陸臨海教育研究センター 特任教授	笠井 宏朗
	岩手大学三陸水産研究センター センター長	田中 教幸
漁業生産者	岩手県漁業士会 副会長	佐々木 康博 (午後の部から出席)
水産加工業者	(有)リアス海藻店代表取締役	平野 嘉隆 (欠席)
水産団体役職員	岩手県漁業協同組合連合会 指導振興課長	町端 敦 (欠席)
一般消費者	社会福祉法人 日本保育協会 岩手県支部長	芳賀 カンナ (欠席)

(順不同、敬称略)